中野先生の銅像の前で行われた顕彰祭

館　報
発　行　社団法人 玄洋社記念館
郵便番号　810－0073
福岡市中央区舞鶴二丁目4番24号
電　話　(092)771－3203
ＦＡＸ　(092)771－1326

玄洋社憲則

第一条　皇室ヲ敬戴ス可シ

第二条　本國ヲ愛重ス可シ

第三条　人民ノ権利ヲ固守ス可シ

厳粛に中野正剛先生顕彰祭

混沌の今、胸中はいかに

今号の主な内容

▽木戸龍一氏に福岡市文化賞＝2面
▽頭山翁の「今様」も披露＝2面
▽賛助会員募集案内＝2面
▽玄洋社記念館など今年の行事日程決まる＝3面
▽石瀧氏、ネットで「玄洋社員名簿」公開＝5面

郷土・福岡が生んだ憂国の政治家、中野正剛先生のご遺徳を顕彰する「中野正剛先生顕彰祭」＝中野正剛先生顕彰会主催＝が昨年十月二十二日、福岡市中央区今川一丁目、鳥飼八幡宮境内に立つ中野先生の銅像前で行われた。

色づき始めた木々に囲まれた会場に、顕彰会会員など約四十人が出席した。また、同日は、中野先生の銅像の作者、彫刻家の木戸龍一氏が平成十七年度の「福岡市文化賞」を受賞されたのを祝してお招きした。

式典は、石井伸治さん(24)＝福岡市博多区冷泉2、会社員＝の力強い法螺貝の吹鳴で開始された。

石井さんは奈良県・大峯山で法螺貝を習得。玄洋社記念館関連の行事の際にご協力いただいている。

同八幡宮の山内勝二郎宮司により慰霊・顕彰の神事が執り行われた。

吉村会長に紹介される松田さん㊨

中野先生の書　松田さん寄贈

式典のあとは、参集殿に会場を移し、直会（なおらい）が開かれた。

冒頭、筑前琵琶旭会、内藤旭美さんの献奏、北園義有さん一門の剣舞で、中野先生のご遺徳を讃えた。

同顕彰会の吉村剛太郎会長（参議院議員）は挨拶で「今の混沌の時代を、中野先生だったら、どうご覧になり、どう行動なさっただろうか。私たちも、確かな目で社会を見つめたい」と述べた。

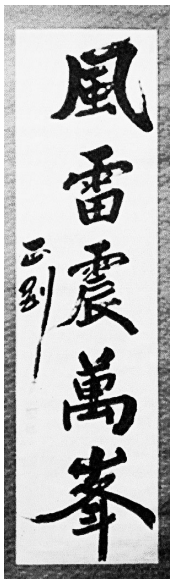
席上、木戸氏の卓話があり、中野先生の銅像制作にまつわるエピソードなどが披露された。（二面に詳報）

また、玄洋社記念館への中野先生の書の掛け軸の寄贈が紹介された。

寄贈されたのは、福岡市中央区鳥飼三の松田洋子さん。書は「風雷震萬峯」。松田さんのご主人の父、伊三氏が所蔵しておられた。

松田家は、昔、庄屋をしておられた地域の名望家で、伊三氏は中野先生、緒方竹虎先生らとの親交があったという。

それぞれ酒肴を楽しみながら語り合い、和やかなひと時をすごした。



中野先生の書の掛け軸

中野先生・進藤先生の銅像を制作

木戸龍一氏に市文化賞

中野正剛先生、玄洋社記念館の創設者・進藤一馬先生の銅像を制作した彫刻家で九州造形短期大学名誉教授の木戸龍一氏が、地元に縁の深い人物像を制作するなど、彫刻を通じて市の文化の向上、発展に大きく貢献したとして、平成十七年度の福岡市文化賞を受賞された。

中野先生像は、昭和五十九年十月の完成。銅像建設期成会会長で当時福岡市長の進藤先生が木戸氏に制作を依頼した。

市美術館南庭に建つ進藤先生の像は平成四年十一月の完成。進藤先生が福岡市名誉市民の称号を受けられた記念に建立された。

昨年十月二十二日の中野正剛先生顕彰祭に招かれ、挨拶をした木戸氏は「受賞には中野、進藤両先生の像の制作が大きく評価されたと思う」といい、中野先生像の制作にまつわる苦労話を披露した＝**写真**。

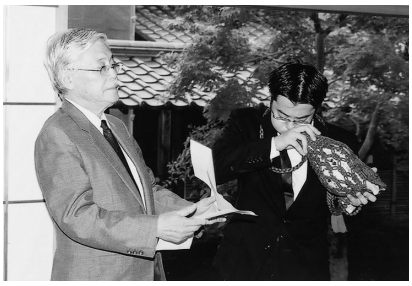
「銅像を建てる場所が北向きで逆光線になる。顔の角度や体の向きに、口ではいえない苦労をした」「中野先生は常に杖をついていた。私は進藤先生に相談して腰に手をあてた、杖なしの姿にした。肖像は、その人の人間性を表現するものだ。中野先生の息子さんや緒方竹虎先生の書物などを読んで中野先生のイメージを解釈した」

ニュース映画の中野先生の演説の姿も、何度も見て研究したという「今年六十八歳。気力、体力は充実している。今後も良い作品を作りたい」と結んだ。

（一面参照）

頭山満翁並びに玄洋社物故者墓前祭

頭山翁の「今様」も披露



「頭山満翁並びに玄洋社物故者墓前祭」＝□明道会主催＝が昨年十月二日、玄洋社墓地のある福岡市博多区千代四丁目の崇福寺本堂で行われた。

祭壇には頭山翁の座像と中野正剛先生の位牌が祭られ、僧侶の読経が流れると堂内は厳粛な雰囲気に包まれた。

祭主の山崎拓・明道会理事長（自民党前副総裁）は「参会者の玄洋社を大切にする心に感謝する。先人のご遺徳を偲びつつ、頭山翁が掲げた大思想を正しく受け継ぎ、玄洋社精神を体して国運の向上に努めたい」と挨拶した。

直会（なおらい）の席で、□玄洋社記念館の浅野秀夫館長が、法螺貝の吹鳴に乗せて頭山翁が愛唱された頭山翁自作の今様を吟じた。法螺貝は玄洋社記念館賛助会員の会社員、石井伸治さん。

千尋の城も時ありて
　煙と消えし例しあり
この武士の勲しを
　萬代までも残すのみ

「残すのみ、と言い切ったところに、頭山翁の決意がある」と浅野館長は解説した。

参会者は、酒肴を楽しみながら玄洋社諸先覚の偉業などを語り合った。

（写真は本堂での法要㊤と今様の吟詠）

「司書会」司書公を追悼

「加藤司書公並びに勤皇党諸烈士追悼会」が昨年十月二十五日、司書公の菩提寺、福岡市博多区御供所の節信院で行われた。加藤司書会の主催。

司書公は、黒田藩の勤皇家の家老。藩論の迷走の犠牲となった。

喜納浩一住職を導師に、司書公と筑前勤皇党烈士を追悼した。

「皇御國の武士は　如何なる事をか勤む可き…」

吟道宰都館の一門の方々が民謡「黒田節」で知られる司書公自作の今様を連吟して、司書公を偲んだ。

賛助会員募集

「玄洋社」は、明治十二年、頭山満、進藤喜平太、平岡浩太郎、箱田六輔ら若い情熱と活気にあふれた精鋭たちによって福岡で創設され、自由民権の普及に献身、アジア諸国の独立に情熱を注ぎました。その創立の経緯と波瀾に富んだ活動の足どりは、近代福岡を語る上で欠かせない存在です。

「玄洋社記念館」は、終戦に伴うＧＨＱの解散命令によって、最後の玄洋社社長となられた故進藤一馬先生（元衆議院議員、福岡市長）が「玄洋社の姿を正しく後世に伝える」ために昭和五十三年十一月に設立されました。

書や書籍、写真など、玄洋社の偉大な足跡を伝える資料を収集し公開展示しています。また、玄洋社関係諸先覚の顕彰事業も定期的に実施しています。

「玄洋社記念館」は、賛助会の会員の皆様の賛助会費によって維持、運営されています。この度「玄洋社記念館」の基盤を強固にし、活動を一層充実させるため賛助会員の拡大を図ることにいたしました。趣旨をご理解のうえ、一人でも多くの方に「玄洋社記念館」の活動をご支援いただければ幸いです。

現在の賛助会員の皆様には、新会員をお誘いくださるよう、切にお願い申しあげます。

社団法人玄洋社記念館
理事長　久保田秀己

賛助会費は次のとおりです。（年間）

▼法人・団体＝一口三万円

▼個人＝一口一万円

賛助会に入会ご希望の方は玄洋社記念館へご連絡ください。資料をお送り致します。

宛先は次のとおりです。

▽〒810－0073福岡市中央区舞鶴二丁目四番二四号

▽電話092・771・3203

▽ファクス092・771・1326

皇族方のご来福相次ぐ
妹尾理事（市議会議長）、お出迎え

仮設住宅の被災者を見舞われる皇太子殿下。㊧が随従の妹尾理事

昨年秋、皇族方の福岡市ご訪問が相次ぎ、福岡市議会議長の玄洋社記念館理事・妹尾俊見氏は、福岡空港でのお出迎え、お見送り、御視察先への随従など、重要な役目を果たした。

同市が主催する第十六回福岡アジア文化賞授賞式が九月十五日に行われ、秋篠宮、同妃両殿下がご臨席された。両殿下はその後、同市で開催された全国都市緑化祭の記念祝賀会にご臨席された。

翌十六日は全国都市緑化祭の会場で記念植樹をされる両殿下との御昼食会が開かれ妹尾理事も出席した。

十月十三日には皇太子殿下がご来福になり、さる三月の福岡県西方沖地震で被災した福岡市・玄界島の人々が住む仮設住宅をご視察された。

さらに十一月十一日には、福岡市などで開催された「ねんりんピック2005」の総合開会式にご臨席のため常陸宮、同妃両殿下がご来福。妹尾理事は御夕食会にも出席した。

妹尾理事は、玄洋社記念館の前理事長、故妹尾憲介氏のご長男。憲介氏も昭和三十年から連続八期、福岡市議会議員を務め、そのうち四十二年から六年間、市議会議長を務めておられ、父子二代の議長になる。

水産物仲卸業界の発展に寄与
安部理事、藍綬褒章を受章

昨年の春の褒章で、玄洋社記念館の安部泰宏理事（㈱アキラ水産代表取締役社長、全国水産物卸組合連合会副会長など）が、多年にわたり水産物仲卸業に携わり、業界の発展に寄与した功績で藍綬褒章を受章。同年八月二十日、福岡市早良区のJALリゾート・シーホークホテル福岡で、受章を祝う会が盛大に催された。

出席者は全国各地から八百人を超え、その顔ぶれも業界はもとより政・財・官さらにはプロ野球福岡ソフトバンクホークスの王貞治監督もと多彩を極め、安部理事の交友の広さを物語っていた。

挨拶する安部理事と公子夫人

祝う会の発起人代表、梅野弘幸氏（㈱福岡魚市場代表取締役社長）は「受章は同じ鮮魚市場に働く私たちにも、この上ない名誉で敬意を表する。副社長、公子夫人の内助の功を忘れないように」と挨拶。安部理事は「家内ばかりがほめられ私のことは出ないが、家庭の平和にはこれがいい」と会場を沸かせ「業界での受章は私が初めて。後進の方々に道をつけたと思っている。今後も魚食の普及に貢献したい」と感謝の言葉を述べた。

鏡開きや祝い舞の披露などがあった。

平成18年の行事日程

平成十八年の玄洋社記念館と関連団体の行事日程が次のように決まった。参加費など詳細は問い合わせ先へお尋ねください。

■廣田弘毅先生顕彰祭（□□廣田弘毅記念青少年育成会主催）

【日時】五月二十日□午前十一時【場所】福岡市中央区城内五、廣田先生銅像前（雨天の場合は福岡県護国神社＝銅像向かい側＝参集殿）【問い合わせ先】□□092・771・3203

■明治十年福岡の変・招魂祭（□□明道会主催）

【日時】六月四日□午前十一時【場所】福岡市中央区平和三、平尾霊園「魂の碑」苑【問い合わせ先】□□092・761・2580

■頭山満翁並びに玄洋社物故者墓前祭（□□明道会主催）

【日時】十月一日□午前十一時【場所】福岡市博多区千代四、崇福寺【問い合わせ先】□□092・761・2580

■中野正剛先生顕彰祭（中野正剛先生顕彰会主催）

【日時】十月二十一日□午前十一時【場所】福岡市中央区今川一、鳥飼八幡宮境内中野先生銅像前【問い合わせ先】□□092・771・3203

■加藤司書公並びに勤皇党諸烈士追悼会（加藤司書会主催）

【日時】十月二十五日□午後二時【場所】福岡市博多区御供所、節信院【問い合わせ先】□□092・281・4182

訂正　九月一日号七面の「咲き誇る『桧原桜』」の記事と見出しで、和歌をつくったのは中学生とあるのは、小学生の誤りでした。お詫びして訂正します。

進藤寿平太の思い出
偲ばるる人々
〈49〉

相撲大会と総選挙

進藤　守康（遺稿）

其の中にただ一つ、栃錦関の激励の辞が、自分には一ときは光って眼に止まった。

長女洋子さんが、病床の母に代わって演壇に立ち、福岡市民に対する深甚の謝辞を贈ったのには、満場覚えず喝采の拍手を浴びせた。

旁々此の機に触れて、栃錦関の相撲ブリを一度見たいものだと云う、好奇心がむら〳〵と動いて、その日自分は妻を帯して、いそ〳〵と會場の國技館に出かけた。

取組開始、午後〇時三十分と謂うのに、午前十一時半、場内は一、二階、雛段とも、文字通り立錐の余地もない大入り満員の盛況で、白シャツや白扇のさざ波に覆われていた。

先ず序二段、三段目から、飛付五人抜きの元気な角力を二回までも繰り返し、『初切』の敏活で滑稽味あふるゝ餘興相撲に腹の皮をよじらせ、それから幕下相撲に入り、再び初切の茶目っ気な餘技に移った訳である。

そこで主催者を代表して、河合警視総監の懇切な挨拶があり、終って十両力士の荘重なる土俵入の一幕を經て、本場所でも滅多に見られない、『相撲甚句』の朗々たる名調子が続いた。美事な化粧廻しに身を飾った、大小七人のお相撲さんが、一人のとり的を中にして、或いは高く、或いは低く、寂びの籠った抑揚のある聲音で唄う数々の歌には、観衆も覚えず歓呼の拍手を送った。就中、結びの一番とも言うべき、地方巡業の最後のお別れの歌など、誠に泪ぐましいお角力さんの気持を良く謡ひ盡くし得て、そゞろ惜別の情に堪えない情感に溢れていた。

再録

来島 恒喜小伝

風蕭々

柳 猛直

◀8▶

爆裂弾の轟音（続き）

ふだん、このあたりは人通りのない場所であり、日も暮れかかっている。「へンだな」と思った瞬間、洋服の男は馬車の左側から駆け寄ってきた。

異様な殺気を感じた馭者は馬に一鞭くれると一旦落としたスピードをあげて門内に走り込もうとした。

その一瞬、洋服の男は馬車に向かって走りながら黒い円筒形の物体を両手で持ってすくい上げるような形で投げつけた。

大音響とともに爆発が起こり、あたりは立ち込める硝煙に包まれた。爆音に驚いた馬は、破壊された馬車を引きずって外務省の構内に駆け込む。

車中では大隈が血まみれの足を抱くようにして倒れていた。警備の警官が、あわてて馬車に駆け寄る。

一方、門外に走り出た警官は、そこに立っていたフロックコート、山高帽の紳士に「犯人はどっちに逃げましたか」と聞いた。

「あっちの方に逃げました」と虎の門の方を指さす。

落ち着き払った紳士の態度に、警官は、この男が犯人とは思わず虎の門の方へ走って行った。

フロックコートの紳士―来島恒喜は右手を高く上げる。外務省の外垣の一隅にひそんでいた月成光に向かって「事成れり」という合図を送ったのだという。

もし来島の一撃が失敗したならば、月成が二番手で大隈を襲うことになっていたのである。月成は一切を外垣の陰からじっと見つめていた。

来島は短刀の鞘を払うと左の耳の下に、ぶっと突き刺した。そのまま、ぎりぎりと引き回すと首の左半分が切断され、頸動脈から噴出する血がフロックコートの胸のあたり一面を見る間に真っ赤に染めて流れ落ちた。来島の体はそのまま地上に崩れるように倒れた。

月成光の回想によれば

「予は当日、外務省外、白堊連壁の一隅にありて来島のなすところを見たり、大隈の馬車轢轆（れきろく）として外務省正門にかかるや、爆弾轟然、白煙濛々たり。来島はおもむろに歩を門外に移し宮城に向かって礼拝するものの如くなりしが、たちまち匕首（ひしゅ＝短刀）をもって頸を截つ。鮮血淋漓として四方を浸し鬼哭啾々悽愴の気人に迫る。予が全身の血は一時に冷却し去りたるかと思う。かくて予も来島の合図により大隈既に斃れたりと思いたれば、やむなく遺骸を残し、外務省裏門の坂を上り清国公使館の前に出で踪跡をくらます。見す見す旧盟の屍を棄てて遠く相距る哀悼何ぞ堪えんや」

（頭山満翁正伝）

警察が確認し新聞が報道した来島の死体の状況は「面長くして鼻高く眼大、髪は長く左右に分け眉目秀麗。推定年齢二十五、六歳。一見、地方の警部の如し」となっていた。なお死顔は両眼を開いたままだったという。

警備の警官が投弾の直前に見た来島は手にもっていた絹張りのコウモリ傘を開けたり、すぼめたりしていたという。傘の中に爆弾を隠していたので、すぐ取り出せるように準備をしていたのだろう。

フロックコートのポケットの中に自分の写真をもっていたので撮影した写真館を調べてみると「来島常吉」と名乗っていたことがわかった。警察では多分、偽名であろうと判断した。この判断は半分当たっていたわけだ。

死体は吊り台に乗せて警視庁に運ばれ検視の後青山墓地に仮埋葬された。

来島が、この時着ていたフロックコートや洋傘、短刀は、後に崇福寺に納められた。短刀は左文字の作で切っ先に刃こぼれがあったのは自殺の際、頸部を引き回した切っ先がネクタイを止めた金具に当たって切断していた。この時に刃先が欠けたらしい。

爆弾を隠していた絹張りのコウモリ傘は当時の最上の品で平岡浩太郎のものであったともいうが的野半介によれば新しく買い求めたものだという。服のポケットには写真と一緒に二十銭銀貨が一個入っていた。

暗殺決行の十八日朝、横浜で来島に別れた竹下篤次郎は来島が白い下着を着けているので不審に思って

「君は坊主のごと白い下着ば着とるが、なんごとかいな」

と聞いている。来島は笑って

「白いものは清潔で衛生上、良いけんな？」

と言っている。なおその時

「おれは近いうちに新しい商売ばはじめる」

といったので

「また八百屋な？」

と竹下がひやかすと

「いや違う。もうおれも昔の来島じゃない。という威張るほどの商法じゃないが多分きょう店開きが出来るじゃろう」

と言った。竹下は、後になって一々、思い当たることがあった。

来島に爆弾の世話をした葛生玄晫が十八日の夕方、神田神保町の中江兆民を訪ねて話し込んでいるところへ他の訪客が来て

「いま番町のあたりを車（人力車）で通っていると霞ケ関の方向で大砲を撃ったような音がして巡査があわてて走っていった」

と話していた。葛生が中江の家を出て「日本」新聞社の前を通りかかると号外が掲示してあり

「福岡県人来島某が大隈外相の閣議の帰途を要し外務省門前でピストルをもって狙撃したが犯人は直ちに護衛のために斬殺され大臣は無事」

とあったので葛生はがっかりするのだが先ほど中江兆民宅で聞いた〝霞ケ関の方角で大砲を撃ったような音がした〟というのが気にかかっていた。

そのうちに各社の号外が次々に出そろうと、やはり爆弾が功を奏したことを知ってほっとしたという。

来島が使用した爆弾は土佐で作られたものであった。

当時、土佐は自由民権のメッカで武闘派の中には爆裂弾作りに熱中するものが多く、相当威力のあるものが製造されていた。

来島が入手した爆弾は土佐の宿毛の山県房吉が作ったもので房吉の父親が火薬の製造業をしていたので彼も火薬の扱いには習熟していた。

この爆弾が宿毛の自由民権家・浜田三孝の手に渡り、浜田はこれを東京に持ち込んでいたが保安条例で追われた時、横浜の墓場に埋めておいた。それを掘り出して森久保作蔵等が多摩の山中の岩陰に隠しておいたものであった。

爆裂弾の形は長さ五寸（約十五センチ）直径一寸（約三センチ）、鉄製の円筒形のものであったという。

大隈は馬車の中から爆弾が飛んで来るのを見ており、のちに「文明の利器というのはえらいもんだ。スーと黒いものが飛んできたと思ったら、ドンとやられた」と語っている。

大隈は右足に重傷を負っていたが生命に別条はなかった。足の傷は右の膝頭から十二センチほど下った内側と、同じく膝頭の上に三センチの内側にあった。外見はさほど重傷とは見えなかったが中の骨が粉砕されているようである。

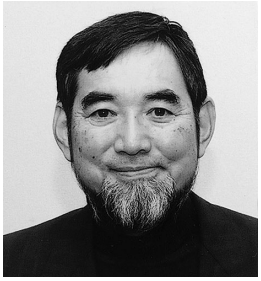
◇

訂正　前回、前々回で「刺客」を誤って「死客」と表記していました。お詫びして訂正します。

ネットで「玄洋社員名簿」を公開
石瀧氏のHP「イシタキ人権学研究所」で

本紙連載「玄洋社関係史料の紹介」の筆者で、イシタキ人権学研究所」所長の石瀧豊美氏が、自身のホームページ「イシタキ人権学研究所」(http://www5e.biglobe.ne.jp/~isitaki/)に、「玄洋社員名簿」のページを設けた。

その趣旨は、同ホームページに記されているので、冒頭の部分を引用する。



石瀧豊美氏

◇

この名簿は石瀧豊美著『増補版　玄洋社発掘』掲載の「玄洋社社員名簿」に追加・増補したものです。

＊『玄洋社発掘』の初版は昭和五十六年（一九八一）五月二十日。付載した名簿は原稿段階で進藤一馬、妹尾憲介、矢野憲一、財部一雄の各氏に校訂をお願いした。平成九年（一九九七）八月二十五日、増補版刊行の時点で若干の補訂を加えたが、基本的には初版当時のまま踏襲している。

同名簿（延べ五八二人）では、第一に備考・略歴欄の字数に自ら制限を課したこと（特定の人物のみ字数を費やすことを避けたのと、全体の分量の圧縮を計らざるを得なかったことによる）、第二に備考・略歴の根拠とした参考資料・文献を明示していなかったことで、課題を残していました。

その欠を補いたかったのと、名簿に新たな人名を追加する必要から「玄洋社員・名簿」をUPしました。

◇

ホームページの名簿と、著書に掲載されている「玄洋社社員名簿」との違いと特徴は次のとおり。

①喜多島家文書から新たに四八人を追加し、総数は延べ六三〇人になっている。

②「備考・略歴」の後の▼以下に、当該人物に関する参考資料が掲げられている。別ページにその記事を掲載した場合は、リンクしている。

③人名および「備考・略歴欄」で外部にリンクしている場合がある。これについてはリンク先の一覧表が作成されている。

④玄洋社員個々について、著書、研究書のある場合はその書名一覧が掲げられている。出版人となっているケースも同様の扱い。

これによって、新たなデータを常に補い、誤りを見つけた場合は、その都度、訂正が可能になっている。

石瀧氏は「社員の中には、まだまだ履歴や墓所などが不明の方が多い。読者の皆様からのご指摘、ご教示をよろしくお願い致します」と呼びかけている。

賛助会員芳名録

17年11月1日現在（敬称略）

▼法人・団体の部

【三万円】

中村工業㈱　（福岡市）
㈱別府梢風園　（同）
バイオテック㈱　（東京都）

▼個人の部

【三万円】

藤田　賢志　（久留米市）
小林　七郎　※右連名

【二万円】

早麻　清蔵　（福岡市）

【一万円】

山内勝二郎　（福岡市）
岩崎　成敏　（同）
酒井　智堂　（鹿児島市）
間地　陸人　（宮田町）
北川　卓逸　（大野城市）
池上　龍一　（八王子市）
鶴岡美和子　（船橋市）
井倉孫二郎　（福岡市）
柴田　文彦　（同）
小野　繁　（宗像市）
中村　敦子　（東京都）
森永与七郎　（上毛町）
菊川　敲　（下田市）
寺田　和弘　（熊本市）
矢島　隆夫　（川越市）
大島　泰治　（大野城市）
皆川　明彦　（さいたま市）
松下栄三郎　（福岡市）
吉田　慧子　（同）
庵原　義一　（古賀市）
渕上　高当　（福岡市）
山内　雅貴　（同）
嶋津　好子　（筑紫野市）
河村　祐一　（福岡市）
松本　健　（同）
田北　利蔵　（同）
廣木　寧　（前原市）

謹賀新年
平成18年元旦

建設コンサルタンツ
建設事業の計画・調査・測量・設計・施工管理
ジーアンドエス・エンジニアリング株式会社
代表取締役　花田　勲
本　社　福岡市博多区東比恵三丁目二四―九　〒八一二・〇〇七　電話（〇九二）四八一―三一〇〇
東京支社　東京都杉並区高円寺南一―二三―一　〒一六六・〇〇三　電話（〇三）五三七八―五八〇〇
営業所　千葉・浦和・神奈川・山口・佐賀・北九州・大分・長崎

福岡鮮魚市場のコア企業!!　21世紀の水産業界を領導するアキラグループ
◇鮮魚仲卸業◇
株式会社　アキラ水産
代表取締役社長　安部　泰宏
本　社　福岡市中央区長浜3丁目11―3―711
電話092―711―6601（代表）
関連会社／株式会社コウトク水産

地下施工のトータルプロデューサー
MSP（地中連続壁、ゼオ土工事、解体工事、地下工事一式（計画及施工）
代表取締役社長　中村　隆輔
本　社　福岡市中央区舞鶴3丁目2の6
TEL　092（751）9381
FAX　092（714）0905
出張所　熊本、長崎、鹿児島

造園・緑化
株式会社　別府梢風園
代表取締役社長　別府　壽信
本　社　〒813-0025　福岡市東区青葉一丁目六―五三
TEL　〇九二―六九一―〇六七八（代）
FAX　〇九二―六九一―四五五四
E-mail：info@shoufuen.co.jp

（財）日本医療機能評価機構認定
HARADOI HOSPITAL
特定医療法人
原土井病院
理事長　原　寛
―開放型病院・臨床研修指定病院―
〒813-8588
福岡市東区青葉6丁目40番8号
☎092-691-3881（代）
http://www.haradoi-hospital.com/

玄洋社関係史料の紹介

石瀧豊美

第36回

宇田川文海『西南拾遺』（十八）

（早稲田大学図書館所蔵）

明治十二年七月刊行
小室信介閲
宇田川文海編輯
『西南拾遺』巻之二

松江、義に依て喜五郎に伴はる。

其時、松江は新士に向ひ、我背よ、左な屈し玉ひぞ。五十円の金ならば妾が兼て蓄へはかりぬ。其をもて負債を済し玉へといひつゝ、手匣かい探りて、五十円の金取り出つ、二人の中へさし出しける。

新士は更なり。喜五郎もヒタと呆れて詞なく、少時面を見合せ居りしが、さて其儘に止むべきにもあらねば、喜五郎金を手に取りつ、数あらためて、打頬笑み、這は思ひがけざりき。放蕩三昧にをは（尾羽）うちからせし此家なれば、兎ても一枚の金さへ調ひがたからんと□□来しに、内君の働きをもて、かく残りなう済し玉はるとは、実に夢に牡丹餅てふ諺にも勝りてうれしく候ふぞや。

いかに新士よ、今は汝と云ひ分なし。些々来よ。茶にても飲て語らはん。内君さらばよ。又こそ参らめといひつゝ、立ちて出行きけり。

新士は深く金の出処をいぶかしみ、松江にむかひて其由問へば、さればに侍り、かの金は妾が爰家に嫁しづく時、たらちねの母刀自が妾を傍によびよしつ、百円の黄金を賜はりつゝ、扨戒め玉ふ様は、この黄金は汝の夫の大事に及ぶまで隠し持ちて、妄りにな使ひ捨ぞ。

むかし山内一豊ぬしの妻は、父より十枚の金賜りて、其を鏡台の中に秘おきつ。平生には麁衣麁食を甘じ玉ひ、苟にもその金の事はいひ出し玉はざりしかば、夫一豊もこれを知り玉はず。

斯くして貧苦の中に世を渡りしが、一日、一豊外より帰りて東国の馬商人、一の駿馬を牽き来り、此国の武士に売りつけんとなしたれど、一人として贖ひ得るものなし。あはれかゝる良馬を買得て戦場に乗出たらんには、いかばかりか称誉にあらんに、銭なき者は口惜しく詮すべなし、といひつゝ太き吐息つきて嘆息なしぬ。

妻これを聞て、さればその価は幾何にてはべるかと問ふ。一豊いひけるは、馬の価は十両なりしと。妻、これを聞きて、鏡台の中よりかの十枚の金をとう出て、一豊の前にさしおき、これをもてその駿馬を贖ひ得させ玉へといひけり。

一豊おどろきて、斯る黄金のありしならば、など平生の貧苦を助けざりしか、と怨じければ、妻答へて、さればに侍り、平生の用になさざればこそ、今日の大事に用立ち侍りぬといふに、一豊も感服なしつ。其金もて駿馬をあがなひ、大に誉を得玉ひしよし、むかしの書にも見えたりき。

されば今汝に与ふるこの金も、努々平生は夫にも語りなせぞ。夫の身の上と思ふことの出来たる時、出して夫の用に供ふるものぞとくりかへしつゝ戒め玉ひしが、扨こそ今日は間に合せ侍りぬ。

平生には見備はすごとく、厨下の器さへ不足がちなれば、況いて喰ふべんものは乏しさに堪やらねど、この金に手を触ては夫の大事ある時、何をもて当侍らんとおもふまゝ、百枚の金は持つゝも、櫛笄を売代なして、それもて日の粥の代となしはべるこそといひつゝ、よゝと泣沈みぬ。

新士も一度はうるさしとおもひし者の姿さへ、心ばへさへ小梅には劣らぬ松江の、かくばかりも我を夫と重んずるよとおもへば、いとどあはれにおぼへて、涙に袖を打しぼりぬ。

其夜、また小梅の方より切なる文の来たりしに、又もや狂ふ煩悩の犬におはれおはれて、博多の町にうかれ来しかば、小梅と一夜語ふ中に、松江の情も打忘れつ。

喜五郎がかたり取りし五十円は四十円己がとりて、十円のみを喜五郎の骨折代とて与へつゝ、十日余りの留連にのこりなくつかひすて、剰さへ跡の五十円をも松江をすかして欺き取り、四月余りも居つづけて、家へは一度もかへらざりけり。

かくつれなくあひしらはば、いかに操かたき松江にも居るに得堪えで逃げ帰りなんと、巧みてなせし事なるが、松江には少しも厭ふ色なく、夫の留主をいと堅固にぞ守りける。

かくて日を送る中に、春過ぎて夏さへも水無月の末ともなれば、夏はつるあふぎとあきの白露といづれがさきにおかんとすらんと、昔人が詠ぜしも身にあたりて、春まだすぎぬ頃よりして、はや秋風の立ちし此身なれば、今ははや秋の扇と共に打捨られて、白露のはかなき浮世を感ずるぞ。

憂き貧しさに家さへ破れて、雨風のすき間もる軒端に、ちらちらと飛びかふ蛍火を見ては、草ふかきあまもるやどのともしびの、風に消えぬは蛍なりけりと、詠ぜしもおもひ出されてあはれなり。

斯くて文月にもなりぬれば、秋来ぬと目にはさやかに見えねども、風の音にぞおどろかれぬると詠ぜし如く、桐の葉戦ぐ秋風に、胸とどろきて空うち詠むれば、天の河の白みわたりてみゆるにつけては、二星適々逢ふて、未だ別緒依々の恨みを叙べざるに、五夜将に明けなんとして、頻りに涼風颯々の声に驚くといひし詞をもおもひくらべ、実に妾は一とせに一夜まみゆる七夕の契にも劣りし身やとうちかこち、盂蘭盆会の灯火の光を見ても、我魂の夫を慕ふて迷ひ出しかともいぶかしみつゝ、葉月の頃ともなりぬれば、園の木の葉のひらひらひら、一つ二つ三つ四つと嵐につれて落散る様を見、庭の露草にしうしうとすだく虫の音のひびくを聞くにつけても、大底四時心総て苦し。

中に就て、腸を断は、是れ秋の天と白居易の詠ぜしも思ひ出られて心くるしく、今来んと誰頼めけん、秋の夜をあかしかねつゝ松虫のなくと或人が読みしも、わがまつ背子はいつか帰へらんと、かこつぞ哀れなる。

況いて十五夜の隈なき月を見ては、わが胸の曇りがちなるを悲しみて、錦を織る機の中は相思の字を弁へ、衣を擣つ砧の上に俄に怨別の声を添ふといひし辞をば吟ずめり。

松江は健気に新士の帰りを待った。写真は新士と小梅が出会った水茶屋の側を流れる御笠川。新士もこの流れを見たのだろうか